



紀々(きき)

1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業後、電子オルガン奏者に。2003年、生涯学習開発財団認定コーチ資格取得後、ライフコーチの仕事始める。哲學家。企業研修やブログ「紀々の記」等を通じて、働く現場の元気度アップに取り組むとともに、音楽、レザークラフトなど幅広い分野で活躍中。

ポジティブ発言のススメ

イマドキの若者に学びたい素直さ

「今日の講義の感想・質問：あなた自身のこと：何でも良いので、紀々への手紙のつもりで、書いてみてください」

これは私が講師をしている専門学校での今期最初の講義で、学生さんにお願したことです。配布したのは、A4サイズの罫線だけが印刷された紙。学生さんの素直な感性で、自由に表現してもらいたくて、あえてこちらからお題は指定しませんでした。

やっぱり、それは大正解！一人の学生さんの用紙の一行目を見て、確信しました。

「紀々先生へのラブレター」。大人の皆さんの研修では、絶対に出てこないタイトルでした。そのほかにも「紀々先生が大好きです」という言葉や、ハートマーク、ニコニコの絵文字が踊っていました。こうした答えが、男女を問わず返ってきたというのも特徴です。

まさに、イマドキの若者。彼らよりは、イマドキを過ぎた36歳の私は、ちよつと恥ずかしくて照れ笑いしてしまいます。そんな時に、いつも思うのです。「イマドキの若者の皆さんの、素直に気持ちを伝える力を見習おう！」と。

これは、とても相手に元気をくれる力です。コミュニケーション下手と言われるイマドキの若者ですが、この点においては間違いなくエライ立場の大人たちを超えていると感じます。

皆さんのまわりでは、いかがですか？

わざわざ言葉にして伝えることの大切さ

一方、叱咤激励の教育を受けてきた世代の方々は、「ほめる」ことが苦手なケースが多いようです。

「ほめると、どうもウソっぽい気がする」と「そんなことを言うと、『下心があるんじゃないか』と疑われちゃうよ：」「こびるみたいで、いやらしくない？」という声も、しばしば。「ほめる技術」を学び、家に帰って奥さんをほめてみたのに、逆に「何かあったでしょう？」と怪しまれてしまったケースも多々あったのではないかと思います。

イマドキの若者と、何が違うのでしょうか？ 私が感じる違いは、「素直さと本気度」。まじりつ気なし、かどうか：そんな感じですよ。

大人になり、肩書きもついてくると、どうしても、「そんなことぐらいで：」「相手にどう思われるだろうか」「大のオトナが」「世間がどう見るか」など、いろいろと複雑になってしまいがち。あるいは、「ほめてやる気を出させよう」「ほめて言うことを聞かせよう」といった策略(?)が混じっていることもあるかもしれません。ここが違うように思うのです。

「ただ素直に、本当のキモチだけをまっすぐ伝える」。これがカギではないでしょうか。

「そんなことまで、わざわざ言わなくても：」という声も聞こえてき

ますが、これだけ時代の変化が早く、世代間のギャップがある現代には、「わざわざ言葉にする」「時間をとって、話し合う」ことはとても大事だと、私は感じています。

もちろん、「話せばわかる」というほど単純なことではありませんが、「話さないよりは、確実に理解度は上がる」と思うのです。

年齢を重ねるうちに、このひと手間を省いてしまつてはいないでしょうか？ 「おいしいね」「楽しいね」「うれしいね」「ありがたいね」「大好き！」「また、会いたいね」：。そんな会話を省くか、言葉にして届けるか、その違いは大きいと思います。

せっかく思っているなら、声に出して、言葉にして伝えてみよう！ イマドキの若者の皆さんのおかげで、あらためて、そう思うようになりました。

「ほめる」となると、どうしても「ほめる」がなくなってしまうのならば、「ポジティブ発言」と表現してみたい。と、私はご提案しています。会議の場・食事の場・飲み会の場・立ち話の場など、さまざまな場で「ポジティブ発言」が増えると、その場の空気の元気度はきつと高まるはずですよ。

職場に笑顔が足りないなあと感じたら、イマドキの若者を見習って、素直に気持ちを伝えてみませんか？ 「ポジティブ発言」には、人を笑顔にするパワーがあります。コストをかけずに職場の空気を変える魔法のひとつですよ。

あした：転機に、なあれ！

あしたのキモチ...
伝えていきますか？